

玉川図書館近世史料館  
出張展



# 黒本稼堂の 仕事と蔵書

令和8年1月29日(木)

~2月10日(火)

写真左上: 21歳の稼堂の肖像(稼堂叢書 091.0-253②)

写真中央: 晩年の稼堂の肖像(稼堂叢書 091.0-253①)

写真左下: 大礼記念金沢市立図書館外観(金沢市写真帖 本館 K291.4//1650)

写真右下: 漱石から贈られた陶淵明全集(091.8-565①)

## <はじめに>

近世史料館で所蔵されている稼堂文庫は金沢市立図書館で最初の文庫です。追加分も含めて、その総数は 8,000 点を超えています。寄贈者の黒本稼堂は明治～昭和に活躍した漢学者・教育者です。各地の学校で教鞭を執り、学者として多くの著作を残した人物です。

今回の展示では、黒本稼堂の生涯と功績、寄贈図書である稼堂文庫、図書館と稼堂の関わりについて、稼堂文庫の史料を中心に、玉川図書館本館の資料も交えながら紹介していきます。

### 【稼堂の人物像】

多くの後進の育成に尽力した稼堂は、没後に石碑が建てられその功績が讃えられました。碑文によると、稼堂は体格に恵まれ、米 1 俵を持ち上げられるほどの力があつたそうです。京都府立第一中学校で稼堂に習った仏文学者の桑原武夫は、稼堂について「けっして洋服をまとわず、紋付きはかまの堂々たる偉丈夫で、古武士の面影があつた」と述べています。

碑文には他に、朴直で飾らない人柄で、人におもねらず、和漢の学に通じ、日夜筆耕に励んでいたと記されています。



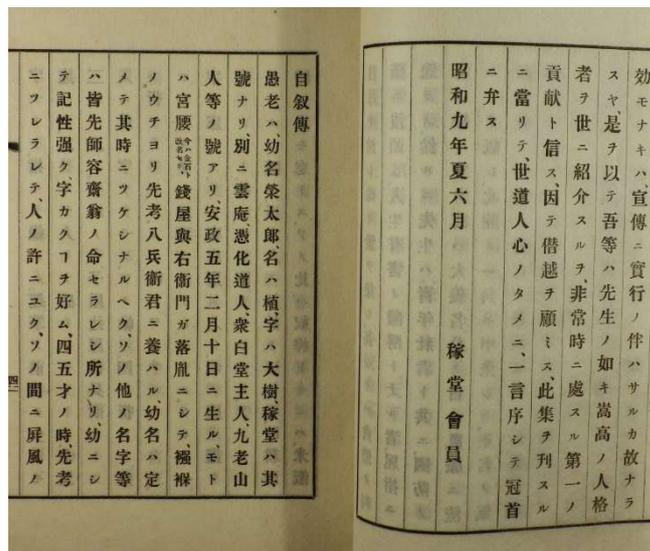
晩年の稼堂(『稼堂叢書』091.0-253①)



黒本植書(091 追-24⑤)



黒本植 草木画(091 追-58①)



### 春酒介寿集(本館 K289//3353)

稼堂の喜寿を記念して出された本で、前半部分に稼堂の自叙伝が載せられています。書名は、『詩経』の「春酒寿を介(おおいに)す」という一節に由来します。

※パンフレット掲載の史料のうち玉川図書館本館所蔵のものは、番号の冒頭に本館と表記します。表記のないものは近世史料館の所蔵です。  
近世史料館所蔵史料のうち、史料番号 091 で始まるものは稼堂文庫の史料です。名前については、一般に知られる稼堂で統一して表記します。

## ＜学を究める＞

黒本稼堂は安政5年(1858)に石川郡宮腰(現在の金石)で銭屋與右衛門の子として生まれました。幼名は栄太郎です。まもなく、専光寺村の農家の養子となりました。幼少の頃より字を書くことを好んだ稼堂は、農作業のかたわら、12,3歳の頃に金石の寺子屋辻屋善兵衛のもとで習いました。

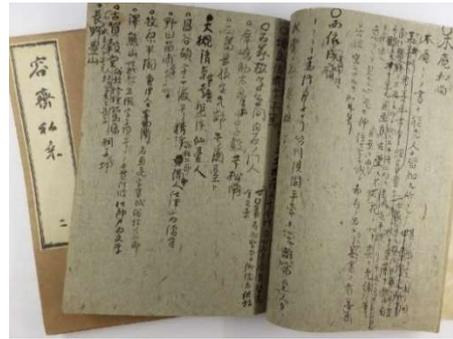
明治7年(1874)に稼堂は金沢に出て学びますが、漢学を修めることを志すようになり、藩校明倫堂の講師であった藤田容齋のもとで学問に励みました。

その後、稼堂は大阪で藤沢南岳、東京で川田甕江、重野安繹、岡松甕谷、小中村清矩など著名な学者のもとで漢学や国学などを学びました。



21歳の稼堂

(『稼堂叢書』091.0-253②)



容齋私乗(093.9-11)

稼堂は容齋のもとで漢学者となる基礎を築きました。そのことを稼堂は晩年に至るまで感謝しています。「植」という名と、「稼堂」という号は容齋からもらったものになります。近世史料館の蘿月窟文庫は、稼堂によって寄贈されたもので、容齋の手沢本になります。

## ＜教師として各地を巡る＞

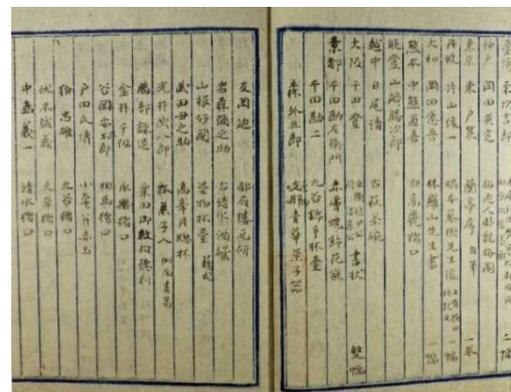
稼堂は明治14年(1881)から教師としての道を歩み始めました。栃木や東京で勤めた後、明治21年(1888)に金沢の第四高等中学校(四高)に着任しました。明治25年(1892)に学生たちが教授退任を求めた騒動を起こし、稼堂はその調停に奔走しますが、非職を命ぜられ四高を去ることになります。非職をめぐっては、校長であった中川元と激論に及んだといわれます。

その後、大分の師範学校を経て、熊本の第五高等中学校(明治27年に第五高等学校に改称)に赴任します。五高に稼堂を招聘したのは、当時五高の校長に転任していた中川元でした。五高では作文や詩歌などを教え、学生寮である習学寮の舎監も勤めるなど多忙な生活を送り、明治32年に辞職しました。

稼堂は年齢を重ねるにつれて、中等教育の必要性を感じるようになりました。

五高を去った後、稼堂は招かれて播州龍野や大阪で教師を勤めた後、明治37年(1904)に京都に移りました。京都は稼堂が15年以上教師生活を送った地で、師範学校、京都府立第一中学校(京一中)、紫野中学で多くの生徒を育成しました。京一中では教頭も勤めました。稼堂は晩年京都を第二の故郷と述べています。

最後は、朝鮮総督府の京城中学校に招かれ、3年講師を勤めて職を辞しました。



還暦記念蔵品目録(091.0-406)

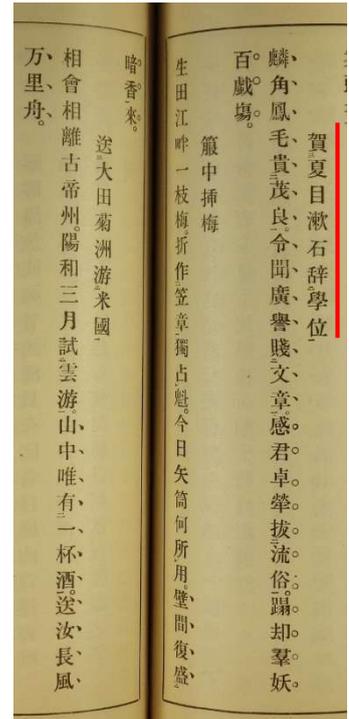
稼堂は京都時代に還暦を迎えました。目録中には京都関係の人物が多くいます。このうち森外三郎は京一中の校長で、石川県出身の数学者でした。稼堂を京一中に招いた人物です。

## <「友人」夏目漱石>

稼堂が熊本の五高時代に交友を持った人物のひとりに、夏目漱石がいます。漱石は稼堂の9歳年下で、五高では英文学を教えていました。稼堂は漢学にも造詣の深い漱石と互いの漢詩を批評し合ったり、また宝生流の謡曲をともに楽しむなど、交友を深めました。

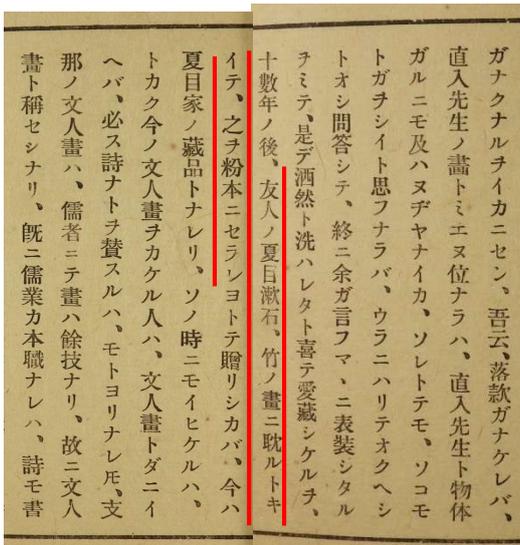
2人がともに熊本にいた期間は3年ほどでしたが、手紙のやりとりなど、その後も交友は続いていました。稼堂が京都で教員をしていた頃には、漱石が竹の画に耽っていることを聞いて墨竹画を贈っています。文部省が漱石に文学博士号を授与しようとし、漱石がそれを辞退したときには、その対応を稼堂は漢詩で賞賛しました。それに対して、漱石は書簡のなかで礼を述べています(『漱石全集』)。稼堂が師範学校の修学旅行で上京した折には、書生に伴われて漱石宅を訪ねています(『漱石全集』)。

漱石が卒業式で読んだ祝辞は稼堂が代作(共作)したものであったという説や、小説の登場人物のモチーフの1人だったという説があるなど、漱石と稼堂を巡っては、さまざまなエピソードがあります。



### 武辺詩史(『稼堂叢書』091.0-253②)

稼堂作の漢詩集です。漱石の学位授与辞退を讃えた詩が載っています。



### 洛遊四日間記(091.9-353)

稼堂が喜寿のときに京都を再訪したときの紀行文です。文中で「友人」の漱石に田能村直入の墨竹画を贈ったことを回想しています。

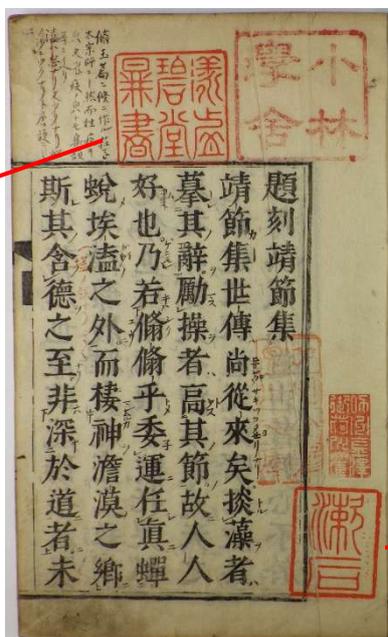
### 陶淵明全集(091.8-565①)

漱石から稼堂に贈られた書物です。陶淵明全集については、漱石が友人である正岡子規への手紙の中で、「帰途米山より陶淵明全集を得て目下誦読中甚だ愉快なり」と感想を伝えていることが知られています(『漱石全集』)。自分が愉快と感じた本を稼堂に贈っていたことがわかります。なお、文中の米山とは、漱石の友人であった米山保三郎のことで、金沢出身の数学者・哲学者です。この陶淵明全集も米山旧蔵のものである可能性があります。

初巻には「漱石」、全巻に「<sup>ようきよへきどう</sup>濠虚碧堂図書」の蔵書印が捺されています(「濠虚碧堂図書」は漱石が熊本時代の明治29年(1896)から使い始めた蔵書印です)。

裏表紙には漱石の物故記事の切り抜きが貼り付けられています。

濠虚碧堂図書

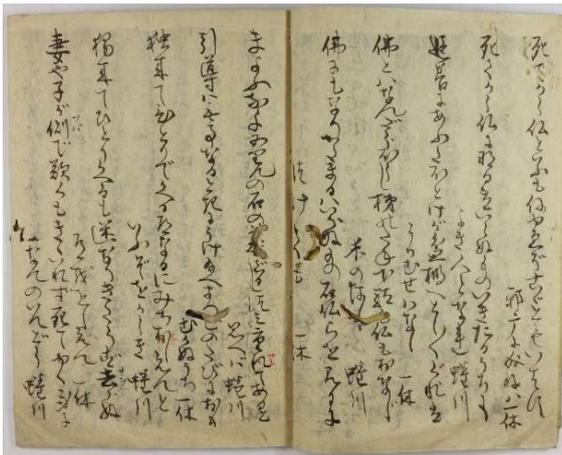


漱石

## <稼堂の蔵書>

稼堂は幼少のころから晩年にいたるまで著述に励んでいました。教師として赴任した各地でも書籍の購入や筆写をしていました。稼堂文庫には「雲庵」や「衆白堂」など自分の号の入った罫紙や、「私立金沢学校」など勤務先の罫紙に記された草稿が残されています。赴任した地域の地誌や歴史にも関心を持ち、調査の成果を自ら著作にまとめることもしています。集めた書籍の内容に考証を加えることもあり、書き込みがあるものも見られます。

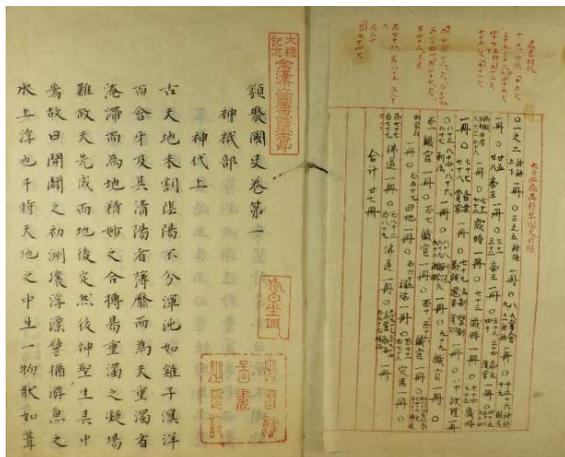
このようにして集められた資料の一部が、後に図書館に寄贈されることになります。



### 一休蝮川狂歌問答 児女教訓(写)(091.8-598)

一休と蝮川新右衛門が狂歌でやりとりする形式の往来物です。表紙に 11,2 歳のころの写しであるという稼堂の書き入れがあります。大阪遊学中には藤沢南岳の父である藤沢東咳の未完書である『易纂』を筆写しています。

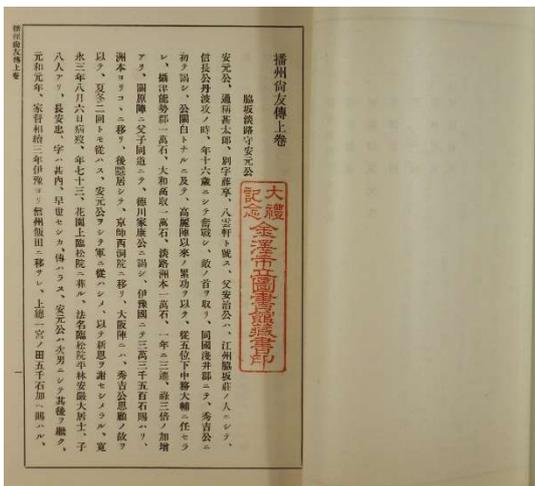
京都時代には大徳寺真珠庵の宗立和尚から『東海一休和尚年譜』を借りて写しています。稼堂は京都で大徳寺龍源院に寄宿していた時期があるので、その縁で借用したものと考えられます。各地でつながりを持った人々から書籍を借用していたことが窺えます。



### 類聚国史(091.9-131①)

熊本藩の藩校時習館の蔵書印が捺された本です。稼堂文庫には、「妙解君遺事」など熊本藩関係の写本が複数点所蔵されています。また、熊本上通の書肆川口屋又次郎の蔵書印が捺されているものもあります。これらは、熊本時代に入手したものと考えられます。見返しには大分県庁本の所蔵巻構成の書かれた罫紙が貼られています。稼堂が大分にいた期間は半年ほどですが、短い期間にも書籍の調査をしていたことが窺えます。

稼堂文庫には、熊本や京都など稼堂が赴任した地域に関する史料が複数点所蔵されていることが確認できます。



### 播州尚友伝(『稼堂叢書』091.0-253②)

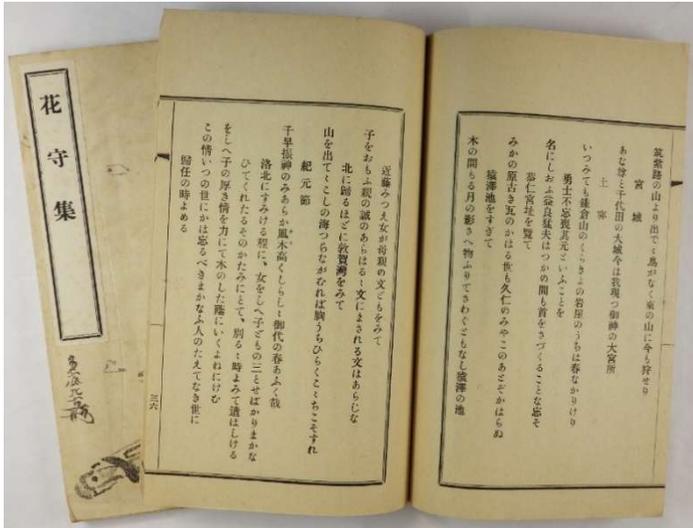
『稼堂叢書』に収録されている著作のひとつで、播磨国に関連する人物伝記です。赴任地の歴史について考証した著作のひとつになります。稼堂が播磨にいたのは龍野にいた半年ほどと短いですが、訪れた地域の歴史について関心を持ち、調べていたことがわかります。

『稼堂叢書』には、熊本関係の人物伝記である「肥後異人談」という著作も収録されています。

## <故郷に戻って>

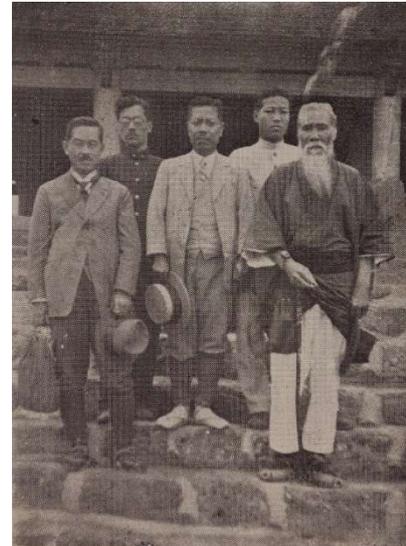
稼堂は大正 14 年(1925)に教師を辞め、故郷の金沢に戻りました。帰郷後は執筆活動に精力的に取り組み、これまでの成果を著作にまとめて刊行しました。代表的なものとして『稼堂集』(漢文各種)、『稼堂叢書』(研究、紀行随筆)、『花守集』(歌集)、『三州遺事』(郷土史)などが挙げられます。内容は多岐にわたります。

また、著述のかたわら、山鹿素行の『中朝事実』などを用いて、青少年に精神訓話を行っていたそうです。



花守集(091.8-406)

昭和 11 年(1936)に出された稼堂の歌集です。短歌、長歌ともに収録されています。名所で詠んだものや、卒業生への祝賀の歌など学校関係の歌もあります。



昭和 3 年頃の稼堂(『広遊志』091.8-403)

朝鮮半島を再訪したときの写真で、一番右の人物が稼堂です。

## <依頼を受けて>

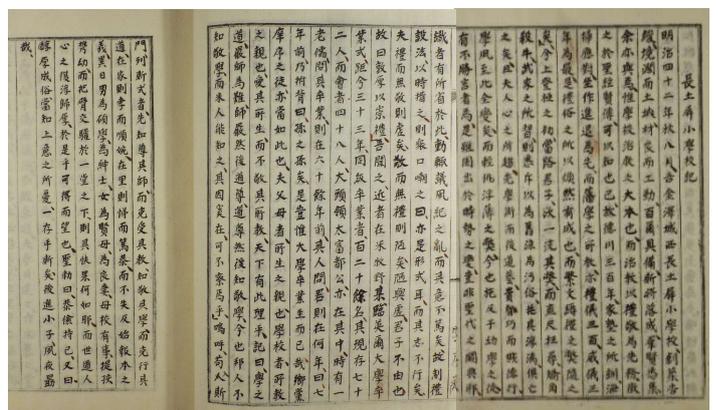
漢学の素養があり能書家であった稼堂は、石碑の撰文と揮毫を依頼されることがありました。揮毫のみを担うこともありました。

神保緑地の新道開削紀功之碑、金沢神社の北条時敬先生頌徳碑、卯辰山の箔業祖記功碑などは、いずれも稼堂が撰文・揮毫したもので、今なお現存しています。

教員時代の明治 42 年(1909)には、長土堀小学校校舎新築落成を記念して漢文体の文章を寄せています。

詩歌にも優れており、依頼を受けて作成することもありました。このほか、書画の鑑定や文章や和歌の添削などの礼状が残されています。

昭和 6 年(1931)には大阪の懐徳堂で論語について講演を依頼されています。知識を見込まれて、晩年に至るまで、さまざまな依頼を受けていたことがわかります。



長土堀小学校校記(『衆白堂集』(091.0-405①))

治教の第一を礼敬と説くなど、道徳教育の重要性を述べています。

<鬼川文庫>

稼堂は長町七番丁にあった自宅 3階の書齋を「鬼川文庫」と名付けていました。鬼川(御荷川)とは、自宅近くを流れる大野庄用水を指します。また、庭には土蔵があり、書庫として使っていたそうです(『加賀能登の家』)。

稼堂は蔵書印にも「加州金沢鬼川文庫」や「加州金沢御荷川文庫」という印記を用いています。このほかに、号にちなんだ「衆白堂蔵」という蔵書印も用いています。

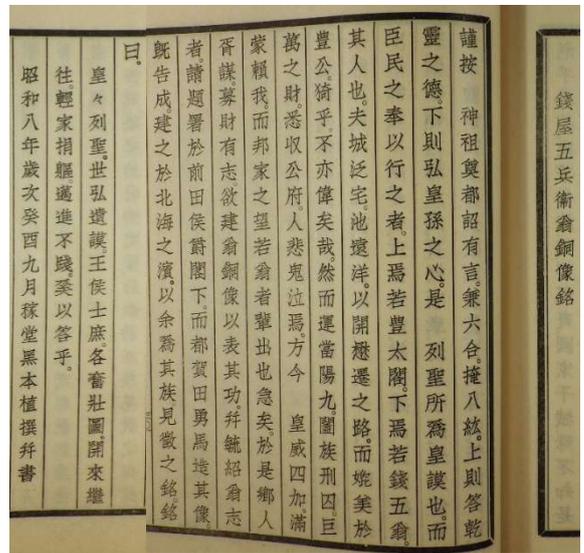


「加州金沢鬼川文庫」「加州金沢御荷川文庫」「衆白堂蔵」

<銭五と稼堂>

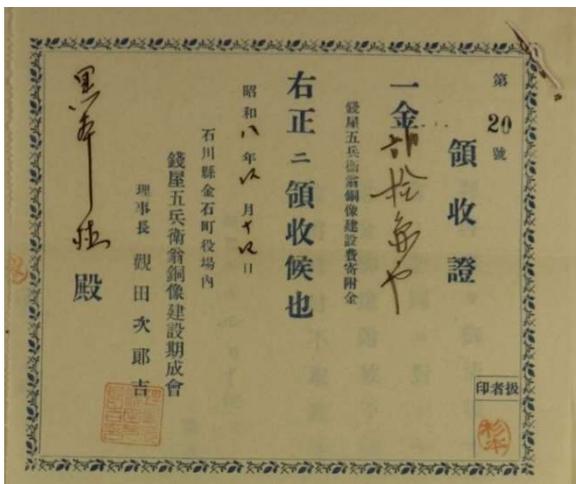
銭屋一族の出身であった稼堂は、銭五のことにに関して協力を惜しまなかったと言われています。銭屋五兵衛像の建設にあたっては、稼堂は建設趣意書を記し、建設費を寄附しています。完成後は、銅像の基壇部分に碑文を記しています。建設趣意書と碑文は『金石町誌』に収録されています。

昭和8年に完成した銅像は、彫塑家の都賀田勇馬の手によるもので、銭屋一族である稼堂をモデルにしたとも、ロダンのバルザック像に着想を得たとも言われています。銅像は戦時中の金属供出により昭和18年に撤去されましたが、昭和23年(1948)に陶像で再建され、昭和47年(1972)には銭五生誕200年を記念して銅像で再建されました。



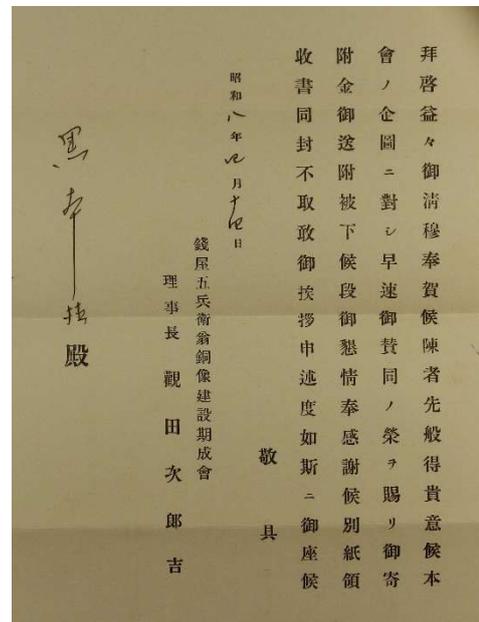
稼堂集(091.0-256③)

五兵衛像の碑文が載せられています。



銭屋五兵衛翁銅像建設費寄附に付礼状及び領收証 (090-1472-79)

上は寄附金の領收証、右は寄附金の礼状です。



## ＜市立図書館のはじまりと稼堂＞

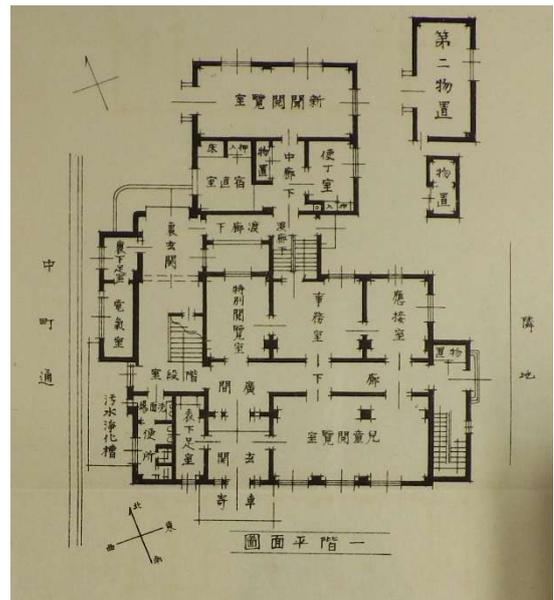
大礼記念金沢市立図書館(以下、市立図書館と表記)は、金沢市の大礼奉祝事業(天皇の即位祝)の一環として昭和5年(1930)に開館しました。現在の金沢市図書館の前身にあたります。場所は殿町(現在の大手町)にありました。建設に際しては、篤志家である中島徳太郎から多額の建設費が寄附されました。また、多くの図書が寄贈されました。

稼堂は読書が人格形成や文化の発展に寄与すると考え、重視していました。そのような考えのもと、稼堂は真っ先に図書の寄贈を申し出るなど、市立図書館の開館を積極的に推進しました。また、運営に関する諮問を受ける商議員になるなど、開館間もない図書館に大きな貢献をしました。

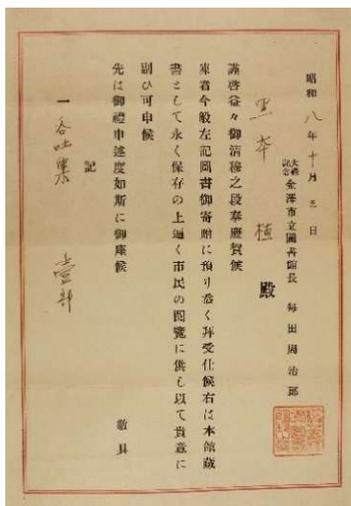
その後も、図書や館記額の寄贈をするなど、市立図書館を支援しています。



大礼記念金沢市立図書館の外観  
『金沢市写真帖』本館 K291.4//1650



大礼記念金沢市立図書館1階平面図(昭和11年)  
『大礼記念金沢市立図書館案内』本館 K010//214



### どんと 吞吐集寄贈に付礼状(090-1472-79)

稼堂叢書の新刊である『吞吐集』が稼堂から市立図書館に寄贈されたときの礼状です。開館3年後の昭和8年(1933)に寄贈されました。差出人の毎田周次郎は市立図書館の2代館長です。



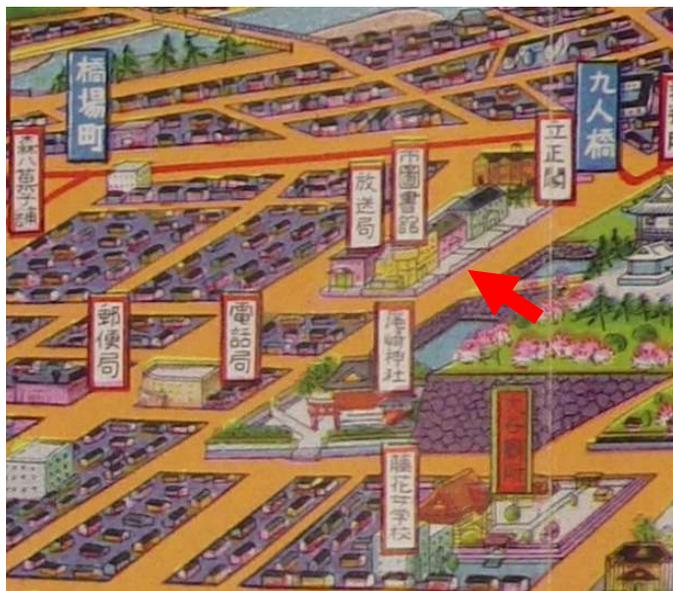
### 館記額

稼堂が撰文し、寄贈したものです。開明の本は教育にあり、教育の基は図書であるとの記述があります。



金沢新市街図(090-1402)

図書館開館間もない昭和6年(1931)の市街図です。



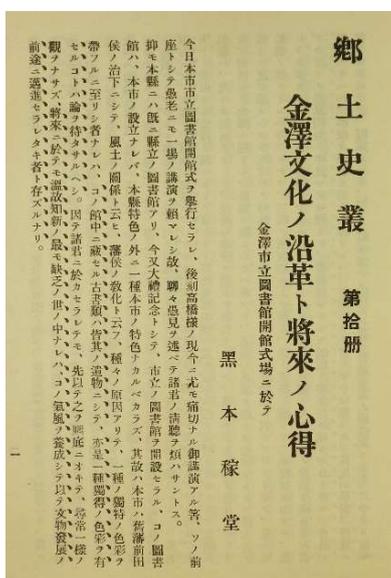
金沢市鳥瞰図絵(『金沢御案内』本館 K291.4//5693)

吉田外二郎筆の鳥瞰図で「市図書館」が描かれています。



図書館の屋上から尾張町方面を撮影した写真

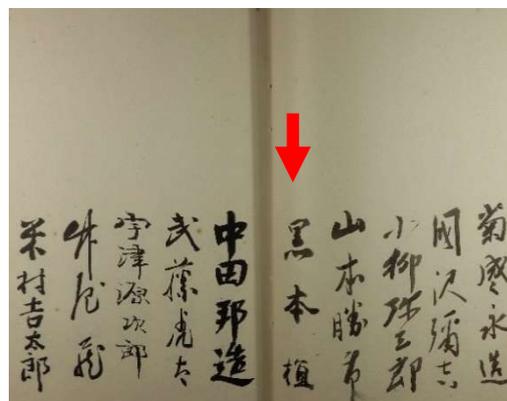
(『金沢市写真帖』本館 K291.4//1650)



郷土史叢

(本館 K080/10/10)

稼堂は開館式で「金沢文化ノ沿革ト将来ノ心得」という題で講演しました。講演では、藩政期は書籍に皆親しみ文化が賑わったことを述べたうえで、「書籍は人間の智府にして又精神浄化の一用具」であり、「読書愛籍の美風」を養うことの重要性を訴えました。



金沢市立図書館落成式芳名録

(本館 K010//214)

開館式の芳名録です。「黒本植」の名前があります。左横の「中田邦造」は当時の石川県立図書館長です。

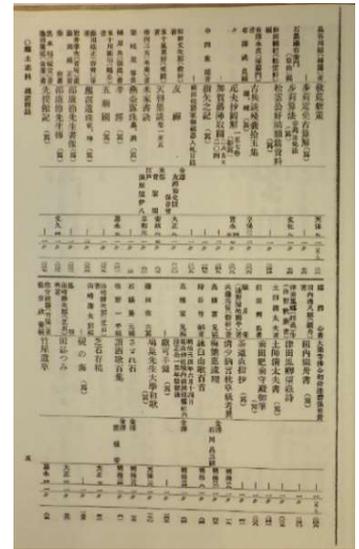
## <稼堂文庫>

市立図書館の開館時に稼堂から寄贈された蔵書は、稼堂文庫と名づけられ、市立図書館の特殊文庫第一号となりました。稼堂文庫は稼堂本人から寄贈されたものと、稼堂の没後にご遺族等から寄贈されたものから成っています。

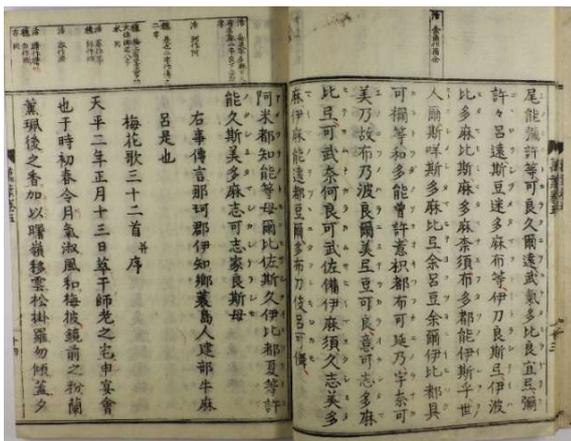
年代の割合は、近世に作られたものが最も多く、次いで明治期の出版物が多くなっています。当時の新刊である昭和初年の出版物も見られます。稼堂が専門としていた漢学のみならず、文学、郷土、芸術、歴史など広い分野の資料で構成されている点が特徴です。稼堂は漢学に限らず歴史や地誌、紀行文、歌集など、幅広い分野の文章を記していますが、蔵書の構成からも関心の広さが窺えます。

目録上は、総記・郷土志料、宗教・哲学・教育、法律・政治、経済・社会、理学・医学・衛生、工学・兵事、芸術・諸技・運動、文学・語学、歴史・地誌に分類されています。

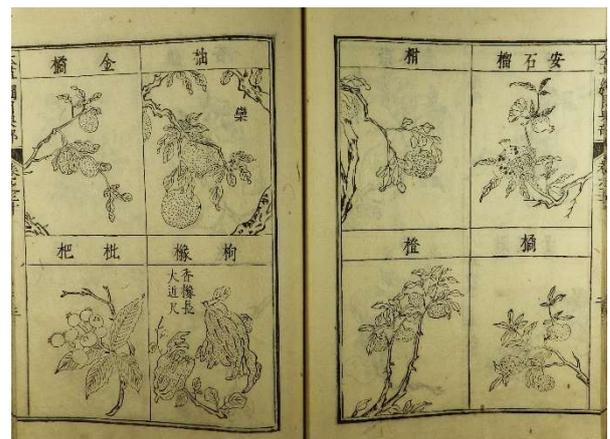
著名なタイトルとして、万葉集、延喜式、古今和歌集、平家物語、古今著聞集、正法眼蔵、本草綱目、康熙字典、源氏物語湖月抄などがあります。



稼堂文庫目録



万葉集(091.0-4⑤)



本草綱目(091.5-57⑳)

稼堂文庫にはさまざまな史料がありますが、そのなかの一部をご紹介します。



### 四書集註(袖珍本 091.0-354①)-(1)-1

南宋の儒学者で朱子学の祖として知られる朱熹の著作で、日本で出版された和刻本です。「四書」とは朱子学での分類で、論語、大学、孟子、中庸のことを指します。『四書集註』は朱子学での四書のテキストで、それぞれに朱熹が注釈を加えたものになります。朱子学の隆盛とともに大いに需要され、近世を通して何度も出版されました。

稼堂文庫には豆本や袖珍本などと呼ばれる携帯サイズの本があります。袖珍本とは、着物の袖に入れられるくらいの大きさの本のことです。

### たくだ 橐駝考(091.5-1)

漢学者堤它山が書いたラクダについての専門書で、書名の「橐駝」はラクダのことです。文政4年(1821)にラクダ2頭がオランダから長崎に舶来し、以後十数年江戸をはじめ各地を巡り、興行しました。本書はその最中である文政7年に出版されました。このラクダは文政9年(1826)6月に金沢にも立ち寄り、卯辰八幡宮で興行しています。(「年々珍敷事留」(『加賀藩史料』13編))

諸書を引用しながらラクダについて解説した本で、漢籍の引用が大半ですが、一部蘭学の文献も引用されています。口絵のラクダの絵は銅版に似せた木版で、文字はオランダ語です。

### きんもろう 訓蒙 窮理図解(091.5-5①)

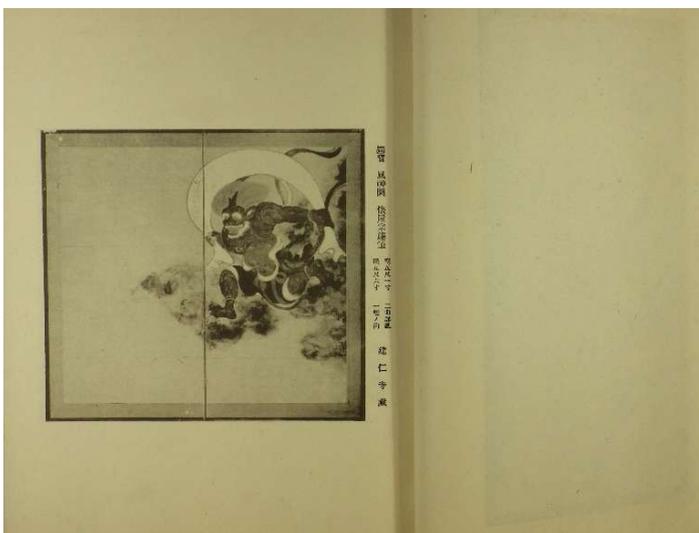
日本初の科学読み物と言われ、「窮理熱」と呼ばれる西洋科学入門書ブームを起こした書物です。全3冊。明治元年に初版が出版されたこの書は、西洋の科学入門書複数冊から抜粋し翻訳したもので、挿絵を用いながら科学現象を説明している点が特徴になります。この書は人気を博し、複数回版を重ねています。稼堂文庫のものは明治6年(1873)の改正再版になります。

著者の福沢諭吉は慶應義塾の創始者である啓蒙家・教育者です。『学問ノススメ』や『西洋事情』が有名で、稼堂も若い頃にこの2冊を素読していたと自伝『春酒介寿集』のなかで述べています。

### 古美術品図録(091.7-75④)

京都帝室博物館(現在の京都国立博物館)で大正4年(1915)に大正天皇の即位を祝して開催された大典記念京都博覧会の第三会場の陳列品を収録したものです。図録4冊と目録1冊から成ります。飛鳥時代～江戸時代まで、おおまかな年代ごとに展示品がまとめられています。収録作品をみると、全国各地の博物館、寺社、個人から借用した多くの美術品が陳列されていたことがわかります。博覧会の開催時稼堂は京都で教員をしており、同地で入手したのと考えられます。

国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できます。



※本パンフレットは展示品の一部を紹介しています。また、展示史料と掲載史料は一致しないことがあります。

<黒本稼堂略年譜>

和暦(年)	西暦(年)	年齢 (数え)	事項
安政5	1858	1	石川郡宮腰で銭屋與右衛門の子として出生 石川郡専光寺村八兵衛の養子となる
明治3	1870	13	この頃、寺子屋辻屋善兵衛のもとで字を習う
明治7	1874	17	金沢に出て藤田容斎のもとで習い、次いで石川県中学校西校に入る
明治8	1875	18	石川県師範学校で学んだ後、5月から9月まで東馬場小学校に出勤する
明治9	1876	19	洋学を学んだ後、再度藤田容斎の門下となり、漢学を修める
明治10	1877	20	容斎の3女恒と結婚
明治11	1878	21	大阪に遊学し、藤沢南岳の塾に入る 塾頭となって下級生に蒙求を教える
明治13	1880	23	東京に遊学し、川田甕江、重野安繹、岡松甕谷、小中村清矩のもとで修業する
明治14	1881	24	栃木県第一中学校教諭となる(～明治15)
明治16	1883	26	帰郷し、石川県尋常師範学校勤務の後、高橋富兄に和学を学ぶ
明治17	1884	27	私立金沢学校で雇用される(～明治20)
明治21	1888	31	第四高等中学校に雇用される 24年に本官に任ぜられ助教授となる
明治25	1892	35	学生の起こした騒動により、非職を命ぜられる
明治26	1893	36	4月に大分県尋常師範学校教諭、 11月に第五高等中学校助教授となる(～明治29、30～32)
明治34	1901	44	4月に龍野中学校教授嘱託 10月に大阪陸軍地方幼年学校教授嘱託となる(～明治36)
明治37	1904	47	京都府師範学校教諭となる
大正元	1912	55	京都府立第一中学校教諭となる 大正5年に願により本職を免ぜられ、嘱託教授となる
大正11	1922	65	紫野中学講師、朝鮮総督府京城公立中学校講師
大正14	1925	68	辞職し、金沢に帰郷
昭和3	1928	71	約半年朝鮮半島広州を再訪
昭和5	1930	73	大礼記念金沢市立図書館の開館式で講演
昭和6	1931	74	稼堂叢書刊行開始
昭和11	1936	79	11月に死去